

明日の指導に向けて

入門期の言葉の指導

京都女子大学教授 ^{よしなが}吉永 ^{こうし}幸司

―入門期の子どもの言葉

小学校へ入学する前の子どもの「一年生になったら…」という夢の中に、勉強ができることというものがある。ここでいう勉強は文字を書いたり読んだりすることであり、足し算や引き算ができるようになることである。国語の場合、この願いに^{こた}えるような指導をしようとするとき、まず大事にしたいのは、新鮮な言葉との出会いである。言葉のぬくもり、温かさを存分に感じ取らせるような教室、言葉についていいなと思えるようなかわりを大切にしたい。そのため、教師が子どもの言葉を敏感に受け入れることが始まりになる。

入門期の子どもは自分が知っているすべての言葉を使って、思っていることや分かってほしいことを話す。その中にある生き生きと輝く言葉を大事に育てることから国語教室づくりの足場を作りたいと思う。言葉が生き生きと感じられるのは次のようなときである。

先生にとっておきの話をするとき

入門期の子どもにとっていちばん頼りにしたいのは先生である。先生にならなくてもお話をしたい、聞いてほしいという気持ち強くもっている。先生と話ができたということ安心し、心を開いていく。子どもが語る言葉の奥にある思いを理解し、子どもの心に寄り添うように受け入れるなかで、さらに生き生きとした言葉が生まれる。しかし、子どもの言葉は幼く、伝えたいこと全てを表現しているのではない。言葉の奥にある思いを理解し、その思いに^{こた}えることから言葉の指導が始まる。

絵や動物に命を通わせて言葉に表すとき

入門期の子どもにとって、絵本、机、黒板など教室の内外を問わず、みんななかよしの友達である。

「これはなんですか。」と問えば、「つくえ」「うさぎ」という言葉が返ってくる。「このうさぎさんは、何を言っているのでしょうか。」と問いかけると、待つてましたとばかり想像したことを

話します。それは自分の経験であったり、誰かに聞いたような話である場合が多いが、話すことが楽しくてたまらないというように次々と言葉を広げていく。

校庭のチューリップも絵本の中の主人公も、命が通う友達なのである。もちろん、昔話の主人公は大好きな仲間である。絵本の中に入り込むことがうれしい。なりきって、心に浮かんだことや思いついたことを表現できるのが楽しいのである。なりきって話せるとき、生き生きとした言葉が生まれ、弾む。

知らない部分に興味をもつとき

読み聞かせをしようと絵本を見せると、「その話 知ってる。」という子が必ずいる。黒板に字を書き始めると、「その字、知ってる。」という声が教室のあちから飛び出してくる。教師にとっては、やりにくい耳障りな「知っている」である。しかし「知っている」は、得意なことであり、自己を表に出す大切な言葉として使っている。

「Q、知っている」を上手にとらえて、「じゃあ、お話ししてらん。」と話を向けたり、「よく知ってるね。じゃあ、これは。」と、子どもが知らないようなことを話題にする。そのとき教室の空気は一変する。「先生、教えて。」と、素直になる。知らない部分に心が向くと、驚くほど素直に、しかも好奇心をもって学習に取り組み。そんなときの子どもの言葉は生き生きとする。

友達や先生に「わたしの話」が分かってもらえると

学習の約束が少しずつ分かってくる。手を挙げて発表する、立つて話すなどを繰り返していくうちに、勉強とは何をするものかを体で感じるようになる。自分の言ったことに友達から応えてもらえることに、手がかりを感じるようになる。

簡単な発表を繰り返していくうちに、上手な話し方を学んでいく。言いたいことが上手に伝わったという実感を得たとき、生き生きとした言葉が教室に広がる。どうしたら先生にほめてもらえるかということについて真剣である。丁寧に対応する姿を見て、自分も先生のようにな

入門期の言葉の指導



りたいという憧れも生まれる。

新しい言葉や文字に出会ったとき

「先生、勉強しよう。字を教えて。」とききりに訴える。文を読むこと、文字を覚えること、文字を書くこと、言葉や文字と新鮮なものとして出会ったのがうれしいのである。それは、指示したように真剣に取り組む姿からも分かる。知っている言葉でも、場や状況で新しさを感じて、次々と言葉との出会いを求める。鉛筆の持ち方、文字を書くときの姿勢、本の持ち方を含めて、真っ白な紙に墨で文字を書く気持ちで丁寧に、繰り返し指導するなかで基本的な学習態度が育つ。

二 言葉の学習に期待がふくらむ出発を

生き生きとした言葉が生まれる教室を作り出す入門期の指導が始まる。学習の出発は第一教材である。第一教材は「早く勉強がしたい」という気持ちに込めるものであつてほしい。が、それだけでなく、初めて出会った言葉は、未来の輝く子どもの中にいつまでも大事にしてもらえるものであつてほしい。さらに、ページを繰ることに新しい世界を拓くような心ときめく内容が展開してほしい…など、期待は広がる。

その中でも大切なことは、分かりやすく、どの子ども教材に入り込めるものが最良であると思つてゐる。そのためには、無理な場面設定でなく、子どもの学びの心を育むような話題で言葉が生まれ、心と言葉が互いに響き合つような内容であつてほしい。

例えば、入学の喜びをそのまま学習に生かせるような身近な生活の場面から始まる教材。あるいは「はる・かがやく・ひかり・きぼう・ともだち・ありがと・おはよう」といった言葉がちりばめられていけば、子どもの言葉を生き生きと引き出せるのではないかと夢が広がる。

さらに、少し欲張れば、短い詩のようなものとの出会いも。私の場合、片仮名から平仮名に変わった昭和二十年代に小学校に入学した。初めての教材は「みんな いいこ」という詩であつた。男の先生がオルガンを弾き、この詩を教えてくださった。「おはなを かざる みんな

いいこ」の言葉や詩のリズムや教室風景を今も鮮やかに覚えてゐる。一年生の初め、短くてもいい、そんな言葉（詩）の出会いもいいなと思つてゐる。

三 生き生きとした言葉を生み出す第一教材の指導

入門期の言葉の指導を、子どもの言葉を温かく受け入れることから始めたいという願いを生かすために、次のことを大事にしたい。

まず教材としては、楽しく学ぶ雰囲気を作り上げるための要素がいくつも含まれていることである。多くの子は、これからどんな学習が始まるかということに不安をもつてゐる。その不安を忘れるような、楽しい世界が待っているという教室開きが第一教材である。知っているものがある、おもしろそうな絵があるなどは大切な要素である。

次に指導については、入学時までさまざまな環境で育ってきた子どもの実態を把握するために、子どもと言葉のかかわりを見守る視点をもつことである。どんな質問でも勢いよく挙手する子もいれば、友達の様子を楽しそうに見ているだけの子もいる。知つていても口を開きず子もいるし、教師の予想を超えるすばらしい考えを言つ子もいる。多様な学びをするのが一年生であり、言えない、書けない、読めないのが入学したばかりの子どもだと考えれば、少しでも話せる、聞けることがすばらしい宝物に見えてくる。

さらに教師の心がまえとしては、一人ひとりの子の様子をしっかりとらえること。これからの指導の方法を考えるためには、ゆったりとした気持ちで、教材や子どもとかかわるゆとりの心をもつて指導すれば、子どもは少しずつ心を開いていく。

国語教室の主役は子どもである。教室には「わたし」と友達と先生がいる。そこでは、いいことが学べる、知らなかったことが分かるなど、充実した時間をもつことの楽しさを実感させたい。学習成果を急ぐのでなく、学ぶ心の耕しを丁寧にするという気持ちをもち続けたい。それが、生き生きとした言葉を生み出す国語教室のエネルギーになる。